
世界一甘いキャンディー

月影れん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界一甘いキャンディー

【Nコード】

N0035T

【作者名】

月影れん

【あらすじ】

「ねえ、コナン君、明日私とデートしない？」その蘭の言葉に、オレは耳を疑った。

GWの5月4日、オレと蘭はトロピカルランドに来ていた。蘭はこれを「デート」だって言うんだ。おいおい、オレはコナンだぞ。そして、アイスにキャンディーに……。本当に甘いのは蘭の……。2011年5月4日「コナン&新一の誕生日記念作品」コナン×蘭

(前書き)

カップリングはコナン×蘭です

「ねえ、コナン君、明日私とデートしない？」
その蘭の言葉に、オレは耳を疑った。

場所はトロピカルランド。何種類もある各アトラクションからの悲鳴混じりの歓声、キャスト達の声、そしてゲスト達の笑い声などが絶え間なく聞こえてきて、テーマパークならではのこの雰囲気を楽しむことが出来る。

それに今日はGWの真っ最中であるせいか、いつも以上に多くの人々で賑わっていた。

そのためか、カップルだけではなく、家族連れや友人連れなども多くおり、気まずい思いもすることはないし、女子高生と小学生の二人組が特段浮くわけでもなかった。

だが、トロピカルランドに来て数時間……いや、ここに来ると決まった時からオレは落ち着かないでいた。

その理由は……。

「コナン君」

オレを呼ぶ蘭の声がした。声のした方へ顔を向けると、飛びきりの笑顔を見せる蘭と目があった。蘭はメリーゴーランドの馬にまたがり、こちらに向かって手を振っていた。

オレは、まるで子どものようににはしゃぐ蘭に苦笑しつつ、素直に手

を振り返した。

だが、そんな蘭が可愛くもあるし、それを今独り占めしていることが正直嬉しくもある。そんな時、オレはつくづく自分の「蘭馬鹿」さを実感するし、幸せな気分で満たされる。

そんな蘭の魔法は強烈だ。一生……いや、死んでも解けることはないだろうし、自分もそんなことを望んでいない。

……そんなことを考えながら、蘭が降りてくるのを待っていた。我ながら恥ずかしくも思うが、それくらいが心地好い。

そうこうしている内に数分後、待ち望んだ彼女がこちらへ歩いてくるのが見えた。

……しかし、何か様子が変わった。蘭は口をへ字にとがらせ、薄桃色の頬をぷうと膨らませていた。

それがなんとも可笑しく、そして愛らしく思わず吹き出しそうになる。しかし、それではますます蘭の機嫌を損ねるだけだろう、と思い直しオレは蘭におそるおそる、

「ど、どうしたの？」

と訊ねた。すると、蘭は薄桃色だった頬をさらに紅潮させた。

「もー！さっき私が手を振った時、無視したでしょー！」

そう言った後、蘭の手がオレの目の前に来たと思ったら、小鼻に軽くデコピンされた。

「う……」

オレは、「さっきボク手を振ったよ」と言おうとしたが、よくよく思い出してみれば、それは一週目の時。たしか、このメリーゴーランドは何週かするはずだ。

だが、オレには一週目の時しか手を振った記憶がない。恐らく蘭はあの後も、オレの前を通るたびに手を振っていたんだろう。

蘭のことを考えていたから、などとは恥ずかしくて死んでも言えない。まあ、どんな理由であれ、蘭が怒るのは当然のことと思えた。

ここはもう謝るしかない、とオレは判断した。

「じ、ごめんなさい」

「もう。……知らないっ」

「あ、えっと……」

予想外の反応にオレはしどろもどろになる。こいつは手強そうだがどうしたものかと必死に考える。どうしたら機嫌をなおしてくれるか……。

対応策を考えながら、少し視線を動かしてみると、歩きながらアイスを食べている親子連れが目にとまった。

そうだ！蘭は甘いものが好きだ。それでご機嫌をとれば。……本人に聞かれたら怒られそうだ。

「そうだ！ボク、アイス買ってくるよ！！」

オレはそう叫び、走り出す。

「え？ちよつと……！」という蘭の声が聞こえた気がしたが、オレは振り向かずアイス売り場へと走っていった。

買って戻ってみると、蘭は先ほどのメリーゴーランド近くに設置されたベンチに座って待っていた。

「蘭姉ちゃん！ほら、アイス買ってきたよ。チョコといちご」

オレは、買ってきたチョコレートアイスとストロベリーアイスを蘭の目の前まで突き出した。蘭は多分、ストロベリーの方を選ぶだろう。

「ありがとう。え〜と、じゃあ両方いただこうかな」

「ええっ！お腹壊すよ〜」太るよ、とも言おうとしたがさすがにやめた。

「もう、冗談よ。じゃあね〜、えっと……、いちごにしようかな」
予想通り。オレは気づかれないように頬を緩め、蘭にストロベリーアイスを手渡した。

「ありがとう。……でも、これでご機嫌をとろうなんて、コナン君

もずるいことするわねえ」

蘭は少し冗談っぽい口調で言った。だが、オレは内心ヒヤリとした。

あちゃー、ばれたか……。

「ごめんなさい……」

「ふふ。もー。せつかくのデートなのに」

デートという言葉がオレの胸に、甘く、優しく、……そして重くのしかかった。

どうしてこんなことになっているのか……それは、今から16時間前に遡る。

風呂上がり、オレがリビングでテレビを見ていた時のことだ。

「ああ！コナン君、ちゃんと髪の毛ふきなさい」

ふいに背後から聞こえてきた蘭の声に思わず驚いてしまった。オレは「あ……うん」と生返事をした。それがいけなかったのか、蘭は不満そうな表情をした。

「もう、いいわ。私がふいたげる」

「え、うわ……ちょ……」

いきなりタオルに頭を包まれたかと思うと、垂れてきた蘭の髪の毛が頬を撫り、その香りに包まれる。

その状況に頭がついていけないまま、されるがままになっていると、今度は背中に柔らかい何か…の弾力を感じた。思わずオレはあたふたし、顔を赤らめる。

あたふたしつつも抵抗はしない自分が我ながら滑稽だ。真っ赤になり、だらしなく緩んだ顔を蘭には見られなくなかった。おっちゃんが出掛けててよかったぜ……。

「よし、終了!」

やっと解放された……と思う反面、名残惜しくもあった。

「あ、ありがとう。蘭姉ちゃん」

「どういたしまして。あ、そうだ、コナン君。……明日、予定ある?」

「え?明日?今のところ予定はないよ」

オレは少し困惑気味に答えた。明日何かあるんだろうか。

この後、オレは蘭の口から信じられない言葉を聞くことになる。

「ねえ、コナン君、明日私とデートしない?」

「ええっ!?なんで!?!」

オレは情けないことに、素っ頓狂な声を挙げ、後ろに数センチ仰け反った。何かの間違いだ。何かの……。

「駄目かなあ?」

「し、新一お兄ちゃんはどつするの?」

オレは激しく動揺しつつ、聞いてみる。

「新一には内緒ね」

「え、ら、蘭姉ちゃん……」

「ね、明日じゃなきゃ駄目なの。ねえ、お願い」

おいおい、その顔は反則だろ。

「コナン君、なにブーツとしてるの？アイス食べないの？」

蘭の声ではつと我に返った。オレはそのまま、手に持っていたチョコレートアイスを食べた。甘い。

オレは横目でチラリと蘭を盗み見る。可愛らしい舌を出し、アイスをチロチロと舐めている姿は可愛らしかった。特に舌の動きが……。うわっ、やめろ、やめろ……！！

ふいに蘭の視線が動いたもんだから、オレは慌てて視線を外した。

「コナン君ったら、口の周りにこんなにつけちゃって」

蘭は、ハンカチをバッグから出し、オレの口元をぬぐってくれた。願わくば、その……舐めとって欲しかったんだが……ってオレ、変態かよっ！

「ああっ！もうこんな時間！アイスも食べ終わったし、行こう。コナン君！！」

「へ？どこに？」

「いいから、ついてきて！」

蘭に手をひかれ、連れてこられたのは、以前オレが新一だったころに蘭と一緒に来た、あの噴水だった。あと、犯人に追い詰められたのもこの噴水だったな……。

「この噴水、前にも来たよね」

「……5、4、3」

蘭はオレの言葉に答えることなく、カウントダウンをはじめた。

オレはその様子をただおとなしく見守ることにした。少し、頬がほころぶ。

「2、1、0 ……！！」

その瞬間、地面から一斉に水が噴射された。それは水の壁になり、オレ達を囲んだ。

「何度見てもすごいね、この噴水」

オレは、その壁を眺めた後、蘭がいるであろう方に顔を向けた。

その時だった……。優しい感触がオレの唇を包んだ。……蘭の顔が目の前にあった。本当に一瞬の出来事だった。今のは夢ではないかと思うほどだ。

頭がついていけないまま、噴水は勢いを失い、やがて放水は止まった。

何か話そうとしたが、うまく言葉が出てこない。

だが、なんとか切り出そうと口を動かすと、コロツと音がした。それを舌で確認すると、どうやらアメのようだった。

オレはそれに困惑しつつ、蘭を見上げた。すると、蘭はクスリと笑った。その顔は赤い。

「そのアメ、美味しいでしょ？コナン君のために買ったんだよ。私からの誕生日プレゼント。コナン君、誕生日おめでとう」

「で、でも、なんでキ、キスなんか……」

「だって、デートなんでしょ？」

そう言う、蘭の悪戯っ子のような笑顔が可愛憎らしい。

オレは蘭から貰ったアメを舌の上で転がした。甘すぎず、酸っぱすぎないレモンの風味が口の中に広がる。

このアメがこんなにも甘く、胸を満たすのは、こいつのせいには違いない……。

「ね、新一」

ガリッ

オレはその瞬間、口の中のアメをかみ砕いてしまった……。

(後書き)

お久しぶりです。月影れんです。

どうやら私は新蘭が書けないようです…。また記念小説がコ蘭になっちゃいました。

色々なカップリングに挑戦したいとは思ってるんですがね…(^^;)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0035t/>

世界一甘いキャンディー

2011年10月3日19時02分発行